

その他アレルギー反応等、重篤なものは1例もみられなかつた。

Ce-49 Cephadrine の口腔組織内移行に関する研究

佐々木次郎・岩本昌平・椎木一雄
武安一嘉・近内寿勝・宮地 繁
小船秀文

東京歯科大学口腔外科

Cephadrine は cephalosporin 系の新抗生物質で、すでに臨床で使用されている cephalixin と同様、経口投与にて良好な吸収性を有するといわれている。

今回私たちは本剤の口腔領域の組織、すなわち歯肉、舌、歯髄、顎下リンパ節、顎下腺および耳下腺への移行濃度を動物を用いて測定し血清中濃度と比較した。

実験方法：実験動物として Wistar 系ラットを用い1回3匹、1群18匹に cephadrine 100 mg/kg を胃カテーテルを用いて経口投与し、0.5時間、1時間、2時間、3時間、5時間および8時間後におのおの瀉血死させ実験に供した。測定は bioassay により、方法は thin layer cup method で、検定菌には *Sarcina lutea* ATCC 1001 を用いた。また同時に cephadrine の血清蛋白結合率を平衡透析法にて測定した。

測定結果

測定により、次のような傾向がみられた。

- 1) 各組織とも投与後ピークに達する時間が速やかであつた。
- 2) ピーク時の濃度を比較すると、血清中濃度が最も高く 27.5 $\mu\text{g/ml}$ 、次いで舌>歯>髄>歯肉>顎下腺>耳下腺顎下リンパ節の順であつた。
- 3) 移行濃度は他の注射用 cephalosporin 系抗生物質と比較して遜色のない高い値を示した。
- 4) 血清蛋白結合率はラット血清では6.6%と極めて低い結合率であり、このことが移行濃度の高い主因となつていると考えられた。

Ce-50 Cephadrine による耳鼻咽喉感染症の治験

三辺武右衛門・村上温子・小林恵子
関東通信病院耳鼻科
徐 慶一郎・稲福盛栄
同 微生物学検査科

耳鼻咽喉感染症から分離した細菌に対する CED の抗菌力を調査し、本剤投与後の血中濃度、組織内濃度などについて検索した成績について述べる。

また耳鼻咽喉感染症 32 例に対し、本剤投与による治療を行ない著効 14 例、有効 13 例の治療成績を収めた。とくに副作用はみられなかつた。

訂 正

本誌前号 Chemotherapy Vol. 23 No. 3 (Mar. 1975) のうち――

奥 付 「入会のおすすめの」2行目

会費年額金 3,500 円 を

会費年額金 5,000 円 に改める。

いちばん下の行

¥ 600.00 を

¥ 900.00 に改める。

裏表紙 広告の下右

¥ 600.00 を

¥ 900.00 に改める。